

龍風柳多留全集 三

自二八篇
至四一篇

岡田甫校訂

誹風柳多留全集三

自二八篇 至 四一篇

三省堂刊



誹風柳多留全集 三

昭和五十二年三月十五日 初版第一刷印刷
昭和五十二年四月一日 初版第一刷発行

校訂者 岡田 甫（おかだ・はじめ）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂

〒一〇一東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三―三四四一（代）
振替口座 東京六一五四三〇〇

誹風柳多留全集三

目次

誹風柳多留

二十八篇	一
二十九篇	三
三十篇	四
三十一篇	五
三十二篇	八
三十三篇	一〇
三十四篇	一二

三十五篇	一五
三十六篇	一五
三十七篇	一九
三十八篇	二三
三十九篇	二四
四十篇	二七
四十一篇	二八
第三卷編集メモ	

柳 多 留 二 十 八 篇

寛政十一未年刊

幸紅花荷のつてに申送り、残暑之
刻弥其御地御店御はんたのよし賀し
このかたむやくの関のさゝはりなく年々
風雅行ハれ取上川登れハくだす
笛叟の点取に象潟のうらみこひ
なき評ハかの藤の中將のたつね給ひし
あこやの姿は木かくれなくひことしも
道野邊の清水流るゝ柳樽櫻木に

のぼせと存ひ御かへしに早々御越の
ほどねぎそろ以上

扶桑に此道の盛んなるをしらさんと
遠く羽陽の好人よりのふみを其儘
廿八冊めの糸口としはたかの地の
連句を篇のむすびとなすを

ゆたかなるまつりことをうく十あまり
ひとつの年月の取中

幸紅花荷のつてに申送り、残暑之
刻弥其御地御店御はんたのよし賀し
このかたむやくの関のさゝはりなく年々
風雅行ハれ取上川登れハくだす
笛叟の点取に象潟のうらみこひ
なき評ハかの藤の中將のたつね給ひし
あこやの姿に木かくれなくひことしも
道野邊の清水流るゝ柳樽櫻木に

……【三八・序】*

御のぼせと存ひ御かへしに早々御越の
ほどねぎそろ以上

扶桑に此道の盛んなるをしらさんと
遠く羽陽の好人よりのふみを其儘
廿八冊めの糸口としはたかの地の
連句を篇のむすびとなすを

ゆたかなるまつりことをうく十あまり
菅裏かいふ

ひとつの年月の取中

三月と五月源氏の餅か出来

からたちに成らす橘返り咲キ

毛深くも吉事鐘馗をめかけうみ

御廣敷かわゆひ馬とぞうろぞろ

大老女ましないほとに片はつし

千切小掛にくゝつた青龍刀

向ふから越すものゝ無イ年の坂

おいしい武士印籠目貫帳の紐

鳳凰か一日驚に化て出る

……【三八・一】*

かわいらしいからと唐木やを手水

外カにない進物夜具へのしを付

積つみか痛ふおすも物日過の事

番附て嬢おはくろをにへ付かせ

嬢のはき短しといへと百兩

送て來た新造前をよく合セ

山吹を持た大津繪暮（に説？）呼ヒ

暮の嬢片足金を繼て來る

やうやく冷氣右手に惹あいしらい

雨夕

柳雨

姫小

枅水

龜水

狸汁

孤雲

丸龍

龜水

雨譚

松哥

狸汁

柳雨

雨譚

素調

孤雲

雨夕

延年

張形ハ早松の味（改）チと多門しやれ 全（二二・一〇）

其晩シハ片ねれに成機の足

足（改）を空にして夜鷹（改）の鬧しさ 全（二二・一〇）

へ（改）のこあつかいふらそこの口をふき

かわらけてこつさに語る櫻艸（改）

ほのゝくに明石も須戸も作り立て

琴箱の花時分行ク下やしき

あくひのふたを一本つゝ公家衆持チ

眞綿で首をつゝまれるはづかしさ

……【三八・二】*

めかけのハ干シふへのする土用干シ

けふも又留守でござると諸葛亮

どこへくと猫の子ニ湯をあびせ

荒にぞあれし喰つみへ嬢ハじぎ

ぶるく物て名を残ヌ天王寺

へしに屠蘇預ケて下戸ハかけ廻リ

市に行キむすこ壘をしよつて來ル

てこずるといふ傾城を淺黄買イ

あかるくかへり言わけはくらひなり

有幸

まゝ成

蛇内

狸汁

龜水（二一・三十一、布山）

鳳頭

玉章

まゝ成

不醉（二六・四十一、不醉）

鳳頭（二六・四十一、鳳頭）

完示（二六・四十二、完示）

湯嶋

左滿

春駒

紀鳥

青好

柳雨

尾上

鯉の看板寺て出す向ふしま

虚無僧ハトリ(まんなせう)してはかとらす

辻たら夫それていゝわなと内侍とめ

團子の物日をゑつとこなとしよわせ

それしやア吉原の道た大たわけ

居風呂を垣根こし呼組屋敷

目出たいと目の出るやうハ大違イ

大わらひ道て下の句おもひ出し

雲をつかんで十五本文を出し

……【二八・三】*

仕合さ足を袋へ入れる也

地黄のむ側に大根美しい

やつと寐ねやしたと剃刀かりて行

雨こん／＼と地口行燈仕舞

白髪ツの若者粉ヲを挽て居

取替て下女ハ鯨を片身買

素見にもうとんせられるつらい事

替へ玉さなそと持参のおくり膳

もふ娘花見に小豆飯を焚キ

丸 龍

全

雨タン

春 駒

ニクヘ

錦 鳥

雨タン

杵 水

喜 水

孤 雲

一 徳

杵 水

雨タン

狐 声

矢 正

雨 夕

梅 子

哥 笑

セツ目の繪て御妾の年かしれ

百へ入れたのハ雀にならぬうち

山／＼の眞マコト青になるほとゝきす

籠まりの屏風へうつるいゝ棧敷

吉野丸吸物か出て船かちり

新宅の柱に冬のしみる音

花嫁の手際秋の田苺如し

持た嫁けふハ藤だの桔梗だの

庖丁をはすに遣ハぬ京の夏

……【二八・四】*

蒼あさ述じゆつを焚かぬ日鐘ひかね立るなり

藝者の窓に松虫の走リ也

新錢座しんせんざ靄かげと鳳凰しりくらべ

覆てもいけぬと嫁ハ松て切

夜や寒し衣や薄し濁リ酒

留守番へ飯いのありかと水滸みづは傳

酔ハこゝにあるよと夜伽かわり合

きうくつな物見垣根へ窓を付ツケ

鳥追ハ琴に合せて彈ひキ歩行

素 調

柳 雨

湖 水

春 駒

鳳 頭(四五・僧)

名 葉

雨 夕

三 交

鳳 頭

鳳 頭

陳 々

虹 朝

萬 仁

虎 同

春 駒

名 葉

三 交

鳳 頭

物わすれするなと梅へ御神詠

上野から見れハ宝の山ふたつ

元日ハ夢と箒に用ハなし

あとけない名札の見へる日本橋

御祭礼娘の新客一ト御殿ン

奥家老髪ハ時行のいさ葉也

藝者一組米て來るのとやかさ

むらさきの鯉ハ濁らぬ橋の下

金の字か付くと屏風もかりられる

……【二八・5】*

閑しさ根のない松を貳本うへ

多弁な武士をとつゝる國家老

しやうのふの匂ひ袋を嫌こさへ

交肴ほとに並へる御師の狀

春永といふが油斷のはしめ也

糸道ハ御藏の間をなかれ込ミ

サア御時宜くと乳を引放し

人の面テ白くと加賀者する

ゆかた着て出しなに筆の軸を切

谷 秀

スゝメ

不 醉

龜 水

カテウ

龜 水

雨 譚

不 醉

一 德

糸 柳

文 集

一 德

交 調

名 葉

龜 水

芋 洗

雨タン

里 笑

(二行空白)

御饗應春の日ながくまた暮す

御本坊難を飭つて見たい所

晝顔の花は式部か筆にもれ

蛤をつむ所九條あたりなり

はつむのハ姉うなるのは弟也

錠前に禿三ツ四ツ口をまけ

付てゆく母も一段聞おほへ

……【二八・6】*

宿下リ芝居の夢かさめたやう

しれぬはつ番丁様と斗リ書

檢校の庭は女房のさし圖也

貳三疋狐を午に買て來る

へつ甲はとちらの道に女もの

下屋舗垣根をひたし物にする

うろたへて並へる將某負たやつ

(改)たる酒であるのに内糞出す氣なし 全(三三・10)

暮の留守を間男打て替にする

歌かるた人つてならて下女取れす

春 駒

志 夕

フクヘ

孤 雲

春 駒

儘 成

古 柳

志 夕

喜 水

古 柳

柳 雨

フクヘ

カテウ

友 呼

壽々女

川 鳥

唐茄子を入たて平ッが安く見へ
 黒鯛をからしで旅の留守に喰
 ゑんまの日調市貳百と帳に付ヶ
 お門ト違さとそろく出来かゝり
 路次口の笑ひ齒入が出して居ル
 おしづまつての御祭りも金屏風
 ひけなてゝ來たハ大きなこけ衣
 木のうごく度よみかへる暑氣見舞
 との子か目つきまん中カの子ハ三分
 ……【二八・七】*

鹿嶋さまおあきなさるとはゞなり
 頭をハ大家へ遣ふ料理人
 村の花嫁ひやう打チのくらて來ル
 封の儘居つゝけニある母の文
 村渡し二棹庄やもとさせる
 股引て角丁河岸へあかるなり
 サアきめろくと隅田の七ッ過キ
 いろけな紅葉こんにやく土産也
 京の廻廊へ江戸ものどさらおち

雨 夕
 霞 朝
 三 交
 タン雅
 雀
 孤 雲
 不 醉
 カテウ
 三 朝
 玉 章
 矢 正
 不 醉 (安六・信4)
 矢 正
 玉 章
 雨 夕
 芹 丈
 玉 章
 榊 水

車引娘をひとり譽なくし
 雞を握リ拳て呼んで居る
 山歸來まづかさばつた藥也
 戸守に母の來て居る旅の留守
 (改)たひくつなもんだとかたひ川つかへ カテウ (三三・10)
 いゝ寐貞見て居るうちにおへる也
 (二行空白)
 ついそ着ぬ物を大名箱へ入
 目に青葉切リて句のなき京の夏
 六十のうちに虫けら五六疋
 ……【二八・8】*

御妾のゆひは裸で動く也
 扇箱はつかしくない拂ひ物
 隣から戻つて雛をせつく也
 (歸明)
 座頭より返事拜聞いたし
 野かけ道畔をゆづつて火を借る
 多葉粉入ほめて娘ハ帯へあて
 かき餅を娘川止め明キへつめ
 玄米女色お袋へ二人ふち
 しかられる手引座頭の足を拭

柳 雨 (二三・39)
 芋 洗
 全
 カテウ
 霞 朝
 孤 雲
 フクへ
 三 交
 儘 成
 孤 雲
 榊 水 (安六・宮2)
 孤 雲
 陳 々
 柳 雨
 錦 鳥
 儘 成
 孤 雲

連弾キハ色氣付たが笑ひ出し

哥はなし石屋がするハ辞世也

風呂敷の高低になる送り膳

板の袋をかふせとく御定杭

米のぬけからを疊屋搗て居る

花咲かせちゝいか來たと新造いゝ

芋見さる間イに頭ヲを計りこみ

弱さうな周倉五月はじめ來る

秋の野すつたるかり着して女房出ん

……【二八・9】*

お釜のはくくにならなハ慈童

伊セ屋の生醉酒だか鯉だか

迹た跡仕内がみんな分る也

そこたよといわれて下女も一首取

山越につん逃べへと輕井沢

獅子の下あごて家根船飯を焚

おいらん様ハとふしやなと淺き晒落^(酒)

首斗りするのハ安イ入替り

むしかれるてんひん棒か太過る

枡水

丸龍

すゝめ

丸龍

門柳

竹二

松哥

春駒

丸龍

雨譚

護畔

喜水

糸柳

狸疊

龜水

竹馬

春駒

龜水

御しのびハ鈴の鳴る場へ蜘蛛下り

月かけハ弓張り鳥ハ矢のことし

ほとゝきすくつと末座て一人り聞

金銀の扇を遣ふ瑠璃の山

不二山ハ武鑑て見ても一ツ也

我庵て見れば左右ハ月と花

清水て飛ふとふたれる花の山

山櫻詩てほめられる花てなし

見聞する物に手に葉を翁つけ

……【二八・10】*

當アもなく二条通りをおぶい出し

花よめにさしつめ望む後の月

姫姑流義を名のるひんのよさ

名物のふたつて宇治ハ夜をねせす

美しい捨物のある三保の松

涙の手しほむらさきの實はへ也

未來記の仕舞いろはを譽て置

夕顔を御ほふしやといふ様な公家

笠木からづふにあびせる久しふり

雨夕

川鳥

全

春駒

錦鳥

雨夕

錦鳥

一徳

カテウ

三交

毒子

十口

魚好

喜水

芋洗

雨譚

延年

雨譚

たすきかけの口上味噌こして来る

後生だとかかれお竹こまる也

とちくるひ跡ひつそりハ荒世帯

棒組曰クしよオハねへ旦那たよ

(改)もふ取て下たるなとはへうけ 全(二二・22c)
あたり近所へはつかしのもりはらみ

(改)まさかの時にしちにおくようひなり、(二二・22c)
また入れぬ内から相模へそをかき

瓦焼く釜ハふざまな口を明ケ

ゑんどう豆ハ飛色にはせて居ル

(改)いろは茶やそくを引ッにはねかれ 全(三一・22c)
江戸詰メに立夜女房ハ五番され

……【二八・11】*

おめかけの様にや奥様もちやからす

(改)芝居をかつてむかしハ女郎かり 全(三一・22c)
仕徳させぞん御臺所ヨ御里持チ

廿五ハ欲心のない手を合セ

夕立チハ帳にくハしい呉服店

供のからかさて娘の内か知れ

八ツの耳ふり立テ歸ル手習子

一ツ身をうしろて合メやかましさ

暮の客か來ぬてしつかり押かき

御詠哥に出るハかゝアのすがれなり

狸汁

錦鳥(末三・1)

枅水

延年

雨譚

龜水

蛇内

龜水

全

全

鳳頭

平喜(傍五・37、雅情)

鼠声

窓梅

鳳頭

三交

長故

ありかたさたまさか井戸て鮎を汲

千シ金を入万年へ礼参り

まこと名鳥と万歳下タに居る

正月にいゝ御領地は二本松

後京極源氏にもれた虫を聞

中ほとへ定家女郎屋ほとならへ

しのきの百本も出来る笠を召シ

奥様の御くしにとんひ鳥なし

袖かき合せて又來春とたち

……【二八・12】*

玉の水榊て斗つてわける也

門松のひつし穗時分姫の札

花の幕毛虫一ッて座か崩れ

富士筑波左右に江戸の渡リそめ

文武の雨舎リ資朝持資

源平に咲分る夜の恥かしさ

公家の子といふか一年立てしれ

よる年を詫の手に葉に遣れる

寐るたんひ家内へ姫は暇乞

雨譚

三交

雨夕

一徳

雨譚

松哥

雨譚

カテウ

雨譚

志夕

交調

有幸

壽々女

雨譚

交調

孤雲

壽々女

和國

門札に鳥追ひ曲リ形りにひき

おとなしい息子俄にどらに成

目薬と鼻のあたりへ書て置キ

俄雨四ツ手にのつて出来心

手拭を鏝にして居る御手廻り

煮たまゝで女房つき出す鯨汁

素一分ハともに消なん雪の朝

灸点を胡彩(巻)ておろすくろん坊

(改)知りもせぬいしやを呼よ込めそつちうは

下女をして居るのハ貧の盜也

……【二八・13】*

(第一行空白)

太平の箒は時雨初かすみ

賑やかさ宝の山の花さかり

白鳥の山田へ下りる夏と秋

春左近夏ハ右近か匂ふ也

御虫干跡に四五枚いてうの葉

奥様ハ正風ていの御むつと

ひんのいゝ遊び手て取鼻て利キ

匂ひたへにして桐の下駄に非ず

全

三交

姫小

鳳頭

有幸

姫小

名葉

萬仁

孤雲

未三月廿七日開
吉祥天も住さうな御山也

松竹の御門をくゝるかんこ鳥

御菓子ハ水の濁らぬ所て出来

御意怖ふない御門番身共也

たいかいな馳走箒て庭を掃

東寺から歸ると御庭からつ掃キ

二階へハ膳の出て居ル百人一首

門松に取附キすかり申入れ

禪寺切て歸るのハ無一物

……【二八・14】*

花の宵今道心の沢山さ

ほとゝきすうかと指身(マ)へ筆の軸

のれんをかゝけ雪を見るこふく店

神酒德利一ツこわして二ツ買

鈴の音にまかきの花ハ咲揃ひ

御はらひへ柄を付てもつ大神樂

お布施をとられ和尚様飯を喰

青く日の裏から當る田植笠

書く度に股をひろける文廻し

三交

矢正

柏之

泥鼠

サマン

泥有

春駒

雨タン

全

泥有

春駒

三交

笠雫

錦鳥

雨夕

龜水

芋洗

偶中

無事な三めくり早道へ貳百入レ

こんな笠よせと忠盛リ呵リ付

軍兵の不足付木て間ニ合せ

身代か廻ると首か廻らねへ

しらぬか佛輿屋から市へ出し

夜着の綿女房に内をせはめられ

かうもり羽織を柳の下て買

三十一年早く死おしかられ

たかる子へ愛相へんな面をする

……【三八・15】*

安ヌ花見立時けつを引ッはたき

かににうの入た娘は聲かわり

とつくりの欠へ植とくとふからし

たゝ廣くはき溜中を南瓜遣イ

内井戸て下女か返事かこんと言

其下てすつほん首をおやしてる

穴も無イクせに面影おしむ也

(二行空白)

(第一行空白)

ありかたい御代ハ竈にたつ煙

御所近く匂ふ名所の八重櫻

芙蓉とハ水きわのたつ御立身

江戸染も京染も入る百人一首

石山て須廣や明石の物あんじ

はんじやうさ薄キハだしに見る斗

十軒が十けんながら公家の宿

四五日ハ難に押される花の山

……【三八・16】*

花の山御幕一ト重の取リアリ

虫干の序手に二日出して遣リ

棧敷のハとれも跡月結た髪

七種に道具のたらぬ荒世帯

雛分ヶに母繩を入レしかられる

新宅の柱に冬のしみるおと

けいせいハ長蛇の陳(マ)を敷て待チ

海上へすらりと並ふ平家方

下手の鞠手の前足のふみ所

柳枝

萬仁

春駒

鳳頭

志夕

春駒

三交

鳳頭

春駒

鳳頭

素調

全

川鳥

名葉(4)

虎同

霞朝

姫小

極彩色の大津繪を暮に呼

貰ッたり預ッたりするいゝ天氣

ゑり紙の吹ちる中で高いびき

九拾匁を奴にする日賑かき

駒下駄に勇ミを付る櫻也

余所て着る夜具を息子ハ仕立させ

箸紙か出來たて息子くらいこみ

唐草の柏あんにハ息子也

ひよつ子が二羽つく籠の鳥三分

……【二八・17】*

廿八才て人間シ界へ出る

お職から遣手ハ嫁へ引合せ

佛ともしらす壹兩貳分て置キ

追かける方がみかんの皮をもち

はだか嫁もつとも豊後名取也

はた餅も里てくふのハ角かあり

暮に取ル御闌びつこか一眼か

へん^(拾)けちな晩ン御免なんしか^{やたら}に來ル

日かけの豆のはぢけたへ四火をすへ

松 哥

糸 柳

門 柳

榮 桂

カテウ

湖 水

狸 疊

曙 山

カテウ

一 徳

錦 鳥

柳 雨

器 水

カテウ

錦 鳥

中 葉

器 水 (拾八・12)

門 柳

物かたり疵のなひ夜の月て書キ

子規不二の素顔を見て歸リ

松風へ横笛ひんのいゝしのび

旧都の名哥八重櫻山櫻

山櫻よみ人しらぬ者ハなし

旅おしぞ思ハす廻るかきつはた

雨にハ烏帽子狩衣ハ風に遣リ

空色を見合せてぬく花の雨

堪忍の折紙今に直か落す

……【二八・18】*

せんをかうやうに吉野ハ堀へ着キ

サア牛も休みやと機を下リ給ひ

そこのきたまへ人くよ嫁の出端

山吹を出して實のある遊び也

七月の節句にやつと窓を出し

座敷牢出したさに母放し鳥

塗樽をふくべのよけるのかけ道

喰かけの芋忠盛へ下タさるゝ

唐の軍サに音曲かふたつ出る

三 交

喜 水

木 印

如 雀

錦 鳥

全

門 柳

孤 雲

錦 鳥

喜 水

雨 声

如 雀

狐 声

錦 鳥

一 徳

如 雀

全

全